

連 載



は じ め の 一 歩



第 18 回

自閉症スペクトラム障害のある 子どもをもつ父親への支援

野村智実 Nomura Satomi

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科小児・家族発達看護学分野

はじめに

近年,わが国においても父親の育児参加を促進する「イクメンプロジェクト」¹⁾をはじめ,父親の育児に対する関心が高まっている。父親は子どもや母親にとって重要な存在であり,父親が育児に参加することで,社会性の発達をはじめ,子どもの成長に有意に影響することが明らかにされている²⁾⁻⁵⁾。しかし,疾患をもつ子どもを有する父親に対しては,まだ十分な支援や研究が行われていない。子どもの疾患は家族にとって大きな危機であり,専門職による支援が必要である。

本稿では,子どもの疾患のなかでも自閉症スペクトラム障害(autism spectrum disorder; ASD)に焦点を当て,家族の特徴や支援の実際について述べる。

ASD 児を有する家族にみられる傾向

発達障害は子どもに比較的好くみられる精神疾患の一つである。精神疾患の診断基準として世界的に普及している DSM-V では,「神経発達障害とは,発達の時期に発症する条件をもつ一連の障害である。その障害は典型的には発達早期,しばしば小学校入学前に現れ,個人的・社会的・学業あるいは職業的な機能を損なう発達のな欠陥により特徴づけられるものである。発達のな障害の幅

は,学習や実行機能の非常に特殊な制限から社会的スキルや知能の全体的な欠陥まで幅がある」と定義している⁶⁾。神経発達障害には,知的障害,コミュニケーション障害,ASD,注意欠如・多動性障害,特殊の学習障害が含まれており,なかでも ASD は,コミュニケーションや社会的相互作用が持続的に障害されるため,両親との相互作用にも影響を生じる。ASD 児を育てている両親は,乳児期からの共同注意の遅れやアイコンタクトの少なさ,こだわりや感覚過敏に起因したかかわりの困難さなどから,健常児の親よりも育児ストレスや育てにくさを感じる傾向が高い⁷⁾。また,幼児期になると集団生活の中で友達と遊べない,ルールを守れない,保育士の指示に従えないなどの問題を生じやすく,親は,「育て方の問題ではないか」といった罪悪感を抱く場合もある。このように,ASD 児の社会的相互作用の障害は,子どもだけの問題ではなく,家族全体にネガティブな影響をもたらすことが多い。そのため,家族を包括的に支援するとともに,家族機能を発揮できるようにサポートする看護職者の重要性は高く,さまざまな支援が行われている⁸⁾⁻¹¹⁾。しかし,わが国では,支援対象のほとんどが母親であり,父親に対する支援は十分とは言い難い現状にある。

ASD 児を有する父親の心理

ASD 児の父親は健常児の父親よりも抑うつや不安が有意に高いこと、子どもの疾患や症状に戸惑い ASD に起因したネガティブな感情を抱きやすいこと、自分の経験を他者と共有することや語る機会を必要としていることなどが示されている¹²⁾⁻¹⁷⁾。実際、医療現場で父親に支援的にかかわるなかで、「この子は働きながら、自立して生きていけるのか」といった将来への不安や、「子どもの行動が理解できないし、どうかかわればよいのかわからない」との戸惑いを話す父親が多い。また、母親からは、「父親が子どものことを全然わかっていない」「やってほしいことがあっても、一から説明しなければならず、かえって面倒だ」といった不満の声もよく聞かれる。父親の多くは自分なりに育児に参加しようと努力しながらも、子どもと接する時間の確保が難しい、子どもとのかわり方がわからない、育児に対して母親と意見が異なるほか、さまざまな葛藤を抱いている。しかし、父親は医療機関への付き添いや育児中のほかの親との交流が少ないため、自分の経験や思いを他者と共有し、問題を解決し、新たな知見を得る機会が母親ほど多くはない。また、父親が自宅外で就労している場合、家庭で過ごす時間が限られているため、ASD 児の行動を直接目することが少なく、子どもや家庭の状態を的確にとらえていない場合もある。子どもに関する十分な情報をもたず、不安や疑問を抱いたまま子どもと接することは、子どもに対するネガティブな感情を増幅させることにつながりやすい。その結果、父子関係は弱くなり、家族内で疎外感を抱く可能性もある。そのため、父親が ASD や子どもの特性を理解したり、自分自身の思いを表出できる機会を設けるなど、父親のニーズや状況に応じた具体的な支援をすることは、とくに重要であると考えられる。

ASD の特性をもつ父親

ASD は脳の機能障害の一つであるが、先行研究から遺伝的関与が示されており¹⁸⁾⁻¹⁹⁾、両親のいずれかが、ASD の特性を有している可能性が高い。とりわけ、ASD は男性の罹患率が高いため、父親にその特性がみられるケースが多い。父親に ASD の特性がある場合、

父親自身の社会的相互作用の障害により、育児のみならず、夫婦関係に大きな支障をきたすことがある。例えば、夫婦という二者関係では、問題なく生活できていた家庭に子どもが誕生する。それに伴い生活スタイルや家族内役割の変化は必然的に起こるが、夫は以前と同じ生活を続け、育児は妻に任せきりになる。育児に協力しない夫に対して妻の不満が高まり、不平を述べるとさらに夫は非協力的になるという、悪循環が起こりやすい。Ogston-Nobile ら²⁰⁾ は、1人の親が常に育児をしている場合、その親はサポートされていないと感じて夫婦の関係性の満足度が下がるとともに、もう一方の親は罪悪感を抱き、育児からより離れていくと述べている。また、Lamb ら²¹⁾ は、夫婦関係の質が高いと考える父親は、育児を含めたさまざまな家庭の仕事に参加し、そのパートナーも父親の参加を高く評価するため、関係性の満足度も高くなることを明らかにしている。これらのことから、育児と夫婦関係は循環すると考えられるが、ASD 児のいる家庭では、悪い循環に陥っている場合も多い。しかし、ASD 児の父親は必ずしも故意に育児に消極的であったり、妻の不満をあおる行動をとっているわけではない。宮尾ら²²⁾ は、ASD 的特性を有する男性は、態度から気持ち想像することが苦手なため、乳幼児のサインに気づきにくいこと、手順を明確に示さなければ行動しにくいこと、家庭内で「夫」と「父親」の2つの役割を同時に担うイメージがもちにくいことを記している。つまり、父親の ASD の特性が育児を行ううえでの障害になっているといえる。

ASD 児を有する父親への支援

ASD 児の父親を支援する場合、父親にも ASD の特性がある可能性を考慮してかかわることが大切である。例えば、乳幼児のサインの見方を一つひとつ教える、生活パターンをスケジュール表にして視覚的に提示する、育児スキルに関する具体的な手順を示すなど、ASD の適応行動を促進する働きかけを育児支援に応用することも有効だと考えられる。また、他者からの称賛は父親の育児行動を強化するとともに、父親が父親役割を獲得し、父親として成長する一助になる。そのため、父親の育児への協力を肯定的に評価することや、「父親」としての成

功体験を積み重ねていけるように配慮し、父親の自己効力感を高めることも重要である。さらに中野ら²³⁾は、「父親の会」というミニレクチャーにより、父親同士の語りを通して自分自身を振り返り、家族への具体的ななかかわりを考えることも家族関係の改善につながると述べている。父親がほかの父親や看護職者と語り合いながら、父親の役割を学習し、家庭でのあり方を考える機会を設けることも有用であると考えられる。

おわりに

父親がASD児の父親として成長し、楽しみながら子どもを育てていくためには、父親への支援が大切である。父親のASD的特性を考慮するとともに、父親の強みを生かし、弱みをフォローするような支援が今後も広がることを願っている。また、父親が育児に参加することは、母親の身体的負担や時間的な制約を軽減するだけでなく、精神的な支えとなる。両親をサポートしていく看護実践は、ASD児の健やかな成長のために重要であると考えられる。

【文献】

- 1) 内閣府：平成26年度少子化対策白書。
http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2014/26webhonpen/html/b2_s4-1-2.html (最終アクセス2017.01.15)
- 2) 森下正康, 阿部恭子：母親と父親のかかわりの特徴と幼児の社会性発達との相互連関。京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要(発達教育学研究) 7：35-47, 2013.
- 3) 秋光恵子, 村松好子：父親の関わりが児童期の社会性に及ぼす影響。兵庫教育大学研究紀要 38：51-61, 2011.
- 4) 木田淳子：父親の育児参与と幼児の発達に関する調査研究；共働き家族を対象に。滋賀大学教育学部紀要(人文・社会・教育学) 31：79-97, 1981.
- 5) 石井クンツ昌子：父親の役割と子育て参加；その現状と規定要因、家族への影響について。家計経済研究 81：16-23, 2009.
- 6) 宮川充司：アメリカ精神医学会の改訂診断基準 DSM-5；神経発達障害と知的障害、自閉症スペクトラム障害。椋山女学園大学教育学部紀要 7：65-78, 2014.
- 7) 安田すみ江, 後藤麻美, 加村梓：発達障害を持つ児の保護者の育児上の困難さに関する調査。小児保健研究 71(4)：495-500, 2012.
- 8) 高木陽子, 東美香, 大島やエ子：自閉性障害児の関わりから考える外来看護；患児と母親の主体性を生かした関わり。日本看護学会論文集(小児看護) 34：101-103, 2003.
- 9) 中満朋美：思春期の発達障がい児をもつ親への支援；肯定的注目をういた親への介入。日本精神科看護学術集会誌 58(1)：482-483, 2015.
- 10) 今井礼子, 浅野みどり, 小林加奈：幼児期の自閉症児をもつ家族の家族機能および支援に関する検討。日本看護医療学会雑誌 8(2)：17-25, 2006.
- 11) 塩川幸子, 北村久美子, 藤井智子, 他：青年期にある広汎性発達障害を持つ本人・家族の生活面の困難さに対する保健師の支援プロセス。日本公衆衛生雑誌 60(11)：705-714, 2013.
- 12) Meltzer LJ：Factors associated with depressive symptoms in parents of children with autism spectrum disorders. Research in Autism Spectrum Disorders 5(11)：361-367, 2011.
- 13) 芳賀彰子：知的遅れを伴わない発達障害児の養育環境とその管理；父母における心身の健康状態と心理社会的治療介入の必要性。子どもの心とからだ 18(2)：266-275, 2009.
- 14) 今西良輔：発達障害児を育てる父親の生活体験；3人の父親と息子達の歩み。北海道医療大学看護福祉学部学会誌 9(1)：27-34, 2013.
- 15) Cheuk S, Lashewicz B：How are they doing? Listening as fathers of children with autism spectrum disorder compare themselves to fathers of children who are typically developing. Autism 20(3)：343-352, 2016.
- 16) Frye L：Fathers' Experience With Autism Spectrum Disorder：Nursing Implications. J Pediatr Health Care 30(5)：453-463, 2016.
- 17) Merritt J, Conlon C：The lived experience of parenting a preschool age, moderately mentally retarded autistic child. The Catholic University of America, Washington, 2010, pp 1-141.
- 18) 土屋賢治, 松本かおり, 武井教使：自閉症研究の最近の話題；自閉症・自閉症スペクトラム障害の疫学研究の動向。脳と精神の医学 20(4)：295-302, 2009.
- 19) 瀬川昌也：自閉症の病因と病態。生体の科学 55(6)：641-646, 2004.
- 20) Ogston-Nobile, Myers BJ, Lotze GM：The Division of Family Work among Fathers and Mothers of Children with an Autism Spectrum Disorder：Implications for Parents and Family Functioning. Virginia Commonwealth University, Richmond, 2014, pp 1-189.
- 21) Lamb ME, Lewis C：The development and significance of father-child relationships in two-parent families. The Role of the Father in Child Development, 5th ed, Wiley, New York, 2010, pp 272-306.
- 22) 宮尾益知, 滝口のぞみ：夫がアスペルガーと思ったとき妻が読む本；誰にもわかってもらえない“カサンドラ症候群”から抜け出す方法。河出書房新社, 東京, 2016, pp 84-112.
- 23) 中野三津子, 辻井弘美：発達障害をもつ子どもの家族とレジリエンス。Monthly book medical rehabilitation 155：67-73, 2013.